

シンガーソングライター

半崎 美子 さん

「ショッピングモールの歌姫」「泣きの歌姫」の異名を持つシンガーソングライターの半崎美子さん。桑田佳祐氏がラジオ番組で称賛したことも注目された。聞く人の心に深く共感を呼ぶ楽曲が生まれる背景には、いろいろな思いを抱えた人々との交流があるという。メジャーデビュー曲「お弁当はこのうた～あなたへのお手紙～」は、NHK「みんなのうた」で放送された。他のアーティストへの楽曲提供や校歌、寮歌、自治体のテーマソングの制作などの幅広い活動、コロナ禍で考えたことなどをお聞きした。

聞き手・構成：佐藤 光子



——シンガーソングライターを目指そうと思われたのはどうしてですか。

高校の学園祭で歌を披露したのですが、そのときに優勝みたいな称号を初めていただいて歌に目覚め、そのまま大学に進みましたが、私は歌手になりたい、東京に行かなければならないという強い衝動にかられました。それで、大学をやめて上京しました。父が猛反対で、ほぼ家出同然に近く、上京してパン屋さんで住み込みで働きました。

——東京での歌手としての活動はどのようにはじめたのですか。

週に1日のお休みを利用して、『タウンページ』でレコード会社や事務所を調べて、自分のデモテープやMDを直接持ち込むみたいなことをやっていました。考える前に行動してしまうタイプなので、断られたらどうしよう、失敗したらどうしようという考えはありませんでした。

——ショッピングモールでも歌っていたのですよね。

2006年に初めてショッピングモールで歌いました。知人がショッピングモールでイベントの司会をしていて、その経緯で出演したんですけども、そのショッピングモールのライブというのが、自分の中で忘れられない経験だったんですね。

最初は、ショッピングモールだから、たくさんの人に聞いてもらえると楽観的に考えていたのですが、実際に歌ってみると、誰も足を止めないし、用意した席も埋まりませんでした。冷静に考えてみると、お客さんは音楽を聞きに来ているわけではないですし、お買い物やお食事に来られている方がほとんどなので、私の歌に足を止める方がまれであるということに気づきました。

ただ、そういう中でも、たった1人、立ち止まって私の歌を聞いて、最後に涙ながらにCDを買いに来てくれる方がいたのです。その出会いが忘れられなくて、ショッピングモールで歌いたいと思うようになりました。その後は、自分から歌わせてくださいという形で交渉して、少しずつ歌わせてもらう場所を開拓していきました。

「陰ナレ」という形で、パーティーションの中で自分で「それでは半崎美子さんのご登場です。拍手でお迎えてください」って言うってからステージに出ることを、よくやっていたんですけど、イベント前にアナウンスがあるだけで、人が「何だろう」というふうに、2階、3階に集まってくれるとか、実際にトライして学びながら、少しずつ歌を聞く人が集まってきてくれたなという感じでしたね。

— そこで固定ファンができたのでしょうか。

ほんの少しずつ増えてきました。ステージが終わった後に、その場でサイン会をして、そこでお客さまと対話をしていました。

ご自身の今背負っている問題とか、複雑な思いを抱えていたり、切実な気持ちを、私に打ち明けてくださる方がたくさんいました。歌う時間としては30分なんですけど、そこからサイン会をじっくりさせていただくというのが、ショッピングモールのライブでしたね。

— 半崎さんの歌を聞いて、自分のことと重ね合わせて考えるような感じなのでしょうか。

第三者である私にだからこそ打ち明けられるということがあるのかもしれませんが。親しい人にも話せないようなことを私に話してくださるというのは、歌の中でどこかで共鳴するものがあって、それが対話につながるのだと感じました。

ショッピングモールは、ある種のオープンなスペースであるということが、対話の時間としてよかったのかもしれません。私がステージでお客さまと向き合って会話して、お客さまは泣いていらっちゃって、私ももらい泣きしてしまい、一緒に泣き合っている。それを自分の番を待っている方が見ている。それだけで、内容は分からなくても、自分だけじゃないのだという、連帯が生まれていたように感じます。

なので、周りはずごくにぎやかで、皆さん買い物をされたりするんですけど、この空間だけはすごく特別な何かがあったのですよね。だから、自分の順番が来て

私の前に来てくれただけで、もうすでに心が開かれているような状態にあるような感じでした。

上京した当時というのは根拠のない自信で、「私の歌聞いてください」みたいな発信タイプだったのですが、ショッピングモールで歌い始めるようになって、受信の大切さにも気づきました。

— その当時のショッピングモールでも、全部自分で制作した歌を歌っているわけですよね。『うた弁』というアルバムがロングヒットになっていますが、その中に入っている歌も歌っていたのですか。

『サクラ～卒業できなかった君へ～』もそうですし、『稲穂』とかもそうですね。歌っていましたね。

— 作曲はどのようになされているのでしょうか。

スタジオに入ってピアノに向かったときに、折りにふれてわっと何か思いがあふれて歌になるという感じです。それはサイン会でさまざまな方たちと対話をしたり、お手紙を本当にたくさんいただいて、そういう方たちの思いや言葉、涙というのが自分の中に降り積もっていて、流れずにとどまっているものがあるのです。それがあつた時、わっとあふれて歌になる。自分が書いているのですが、誰かの思いを私というフィルターを通して、歌にしている。だから、自分の思いを書いているのではなくて、誰かに託された思いを歌にしているという感覚がすごくあります。ショッピングモールでの活動で自分の心の在り方が、かなり変化したと思います。楽曲が生まれるたびに、誰かの思いを歌にすることが自分の自己表現なのかもしれないというふうに思っています。

— こういう曲を書いてほしいというようなお手紙も来るのでしょうか。

書いてほしいということではなくて、単純にご自身が現在抱えている苦しみとか悲しみとか、いろいろな思いが綴られていて、そういったお手紙をたくさんいただきました。言葉にするとか文字にするのは、すごく

エネルギーのいることですから、もうそれは本当にありがたい気持ちでいつも読ませていただいています。

— 上京して17年間、いろいろ活動された後にメジャーデビューされますが、その間、歌手をやめようと思ったことはなかったのでしょうか。

17年間、自分の中では1日も無駄な日がなかったと思っていますし、必要な17年だったと思っています。上京してすぐにデビューしていたら、これまでのような出会いや歌も確実に生まれてないです。だから、下積みという感覚がまるでなく、大変なことはいっぱいあったのですが、かけがえのない時間だったと思っています。

— メジャーデビューで、歌手活動が大きく変わったことはありますか。

環境は、確かにすごく変わったのですが、心境はそんなに変わっていません。ただ、私の場合はショッピングモールで歌うということで、直接目に見える変化があり、その景色の違いに驚きました。自分が入った時点で2階、3階まで既に人が集まっている光景が信じられなかったですし、私の歌を、もう口ずさんでいる方もいるということが驚きでした。

— 今は、ショッピングモール以外に、どのような活動をされていますでしょうか。

ショッピングモールとコンサートと、あとは学校公演や施設に歌いに行くことも大事に続けています。コンサートは5周年記念コンサートが先日ファイナルを迎えました。デビューしてから突き進んでいた3年と、まさにコロナ禍でいろいろな歩みをストップするという2年で、すごく振り幅がありました。

— コロナ禍で歌手活動に影響はありましたか。

8カ月はコンサートもできなかつたです。楽曲を提供するという活動はできたのですが、私の場合は直接歌を届けるということをとっても大事にしてきたの

で、歯がゆい気持ちはありました。この2年間で立ち止まるということを経験して、その経験をテーマに制作したのが『うた弁3』というアルバムです。

『うた弁3』の1曲目に「地球へ」という曲を収録しているんですけど、本田美奈子さんが生前に残された散文がいくつかあって、そこから思いを受け取って自分なりに書いた歌で、その曲も収録されています。

— 他の歌手の方とのコラボもあるのですか。

森山直太朗さんに楽曲を提供していただいた『蜉蝣のうた』という曲がありますし収録されています。天童よしみさんへは『大阪恋時雨』という曲を提供し、紅白歌合戦で歌っていただきました。

— 自治体のお仕事をされることもあるそうですね。

母が利尻島出身で、利尻富士町開町140年記念の『ふるさと利尻島』という曲を書かせていただいてフェリーでも流れています。北海道恵庭市で開催したガーデンフェスタのテーマ曲を作ったりもしています。

— 学校関係の曲も制作していますね。

もともと学校公演によく行っていたというのもあるのかもしれないです。これまで校歌や、寮歌の制作をしましたが、校歌はずっと歌い継がれるものなので、その大切な校歌を私に託してくださったことがとてもありがたく、実際に何度も足を運んで生徒さん、先生たちと対話をしながら書いています。

— 夜間中学の校歌も制作されていますね。

夜間中学は、70代、80代の方や、海外の方など、経済的な理由、健康問題などさまざまな理由で義務教育を受けられず、文字の読み書きができなくて大変苦労された生徒さんが通われていて、その生徒さんにお会いしたり、生徒さんを熱心にサポートしている先生方ともお会いしました。

生徒さんは、皆さん文集や手記を書かれていて、ご自身の半生が書かれていて、特別な光が宿っていたん

ですね。単純に文字が書けるようになったから書いたというだけではない、ご自身のさまざまな過去、人に言えなかったことを学校生活の中でやっと語れるようになったという意味合いがすごく強いものだったんですよ。それを見たときに、私が主人公の物語を綴るとか紡ぐということを、この学校の校歌に入れたいと思って、『私の物語』という校歌を作りました。学校生活の中で校歌が伴走するような存在であつたらと思いましたが、この校歌をきっかけに、夜間中学校の存在を必要な人に知ってもらえるかもとも思いました。

— 学校の寮歌も制作されていますね。

在学中に亡くなった生徒さんがいて、卒業式のときにみんなで一緒に思いを送りたいということで、『サクラ～卒業できなかった君へ～』という曲を歌ってほしいというのが当初の依頼でしたが、そこから寮歌を作ってほしいという話になり、寮の生徒さんや寮母さんにお話を聞いたりして制作しました。寮では、毎朝、寮歌が流れているようです。

— 学校関係の曲は今後も制作していきたいですか。

自分の歌が自分よりも長生きしてほしいという思いもすごく強いので、歌い継がれる楽曲として、校歌などには今後も取り組みたいと思っています。私の曲で、小中学校の教材用に掲載されている曲は既にあるのですが、自分の曲が教科書に掲載されるのが私の夢です。

— 今後やってみたい活動はありますか。

コロナ禍で中断されていたショッピングモールのライブを再開したいです。自分にとっては、すごく生きがいが必要不可欠な時間です。あとは各地を回って、直接歌を届けることを続けていきたいです。全国ツアーもしていますし、毎年いくつかの学校の卒業式にも歌いに行っています。

学校公演はずっと続けていきたいですね。子供たちとの合唱も、できなくなった時期もあったのですが、

自分の歌を歌ってくれる学校が少しずつ増えてきて、一緒に歌ったりするというのは、すごく自分の中で大きな喜びです。

— 『うた弁3』は、「コロナ禍を経て、立ち止まる」をテーマに制作したそうですが、どのようなことをイメージして作ったのですか。

テーマを集約したのが『足並み』という曲なのですが、悲しみや苦しみの中において、そこから1歩も動けずに立ち止まらざるを得なかった、そういう方に私自身がたくさん出会ってきて、その方たちの生き方とか言葉を思い出したんですね。『足並み』という曲は、そういう今立ち止まっている方たちとはぐれないように歌い続けたいという、自分の強い意志を込めました。

— 弁護士や弁護士会に期待することはありますか。

私にお手紙をくださる方や、お話ししていただく方で、弁護士と接点のある方というのはたくさんいらっしゃいました。弁護士には、声なき声、小さな声を受け取る人であってほしい、一番弱い立場の方にとっての一番の味方であってほしいという願いがあります。声なき声というのは、亡くなった方たちの思いだったり、声というのも含めて。職業だったとしても、最後には1人の人間として誠実に向き合ってくれる方であってほしいと思います。

当事者の方の希望通りに物事が進んだとしても、本当の意味での解決って、なかなかないと思うんですよ。ただ、その過程で真摯に寄り添ってくれる方がいたら、それがすごく救いになるなというふうに思います。

プロフィール はんざき・よしこ

北海道出身のシンガーソングライター。17年の下積みを経て2017年にメジャーデビュー。「ショッピングモールの歌姫」として話題となり『情熱大陸』の出演で反響を呼ぶ。NHKみんなのうた「お弁当ばこのうた～あなたへのお手紙～」や「サクラ～卒業できなかった君へ～」などの楽曲がロングヒットとなる。